

100人のNEWS

No. 181

NPO法人教育再生地方議員百人と市民の会

理事長 大阪市議員 辻 淳子

【発行・編集責任者】

事務局長 増木重夫

大阪府吹田市古江台

2-10-13

TEL 090-3710-4815

FAX 06-6835-0974

http://www1.ocn.ne.jp/~h100prs/

米国防務省研修所日本校で講演

柏市議会議員 上橋 泉

平成23年2月28日(月)午後、横浜市「港の見える丘公園」のそばにある米国防務省研修所日本校で、日本の地方自治について講演しました。

現在、同研修所日本校で日本語並びに日本の歴史文化を学んでいる国務省の外交官は8名で、リンクは本年中に総領事として赴任する者から、昨年国務省に入省した者など、さまざまでした。

講演は、日本の地方自治についてが中心でしたが、それ以外に私が彼らに對しどうしても話したいことがありました。それは、以下のことです。

私がアメリカの対日世論を長年見つけてきて、「彼らは日本人に對し、何故このような偏見を抱くのだろうか」と思う局面が多々あります。その偏見が、どこにあるかを突き詰めて考えると、彼らは「日本は科学技術と経済においては、欧米に並ぶことになったが、思想面では未だに未開国である。日本人は実存主義的ないしは形而上学的思考ができる民族ではない」と思っているか、或は思いたがっているのではないかと言うことに突き当たります。

アメリカ人がそのように思っているのは、彼らが「自分たちは、どこか一点でも日本人より優越して欲しい」と言う心情の他に、日本には戦後、丸山眞男のように、「日本は思想面では未だに未開国である」と言っているばかりなかつた人物もいたわけですから、アメリカの日本に對する偏見は抜き去りがたいものになったのだと思われれます。

このたびの機会を利用して、アメリカのエリアートに、「日本人は思想において、西欧に匹敵するものを持っている」と知らしめてやりたいと思いました。講演原稿の中、思想に

関する部分を抜粋して添付しております。ご覧いただければ、幸いです。

日本人の思想性と日本外交の形

(疑問)

日本の外交スタイルは、普遍性を持つ世界像を自ら決して提示しないで、それを外国政府に提示させて、そのフレームの中で日本の利益を図ろうとするもので、この姿勢は明治以来、一貫して変わらない。

明治以来、日本政府が世界に向かって普遍性を持つ世界像を提示したのは、二度しかない。一つはベルサイユ会議での人種平等宣言、もう一つは大東亜共栄圏宣言である(世界から歓迎されたかどうかは問わない)。日本政府が胸を張って出した世界政策は、明治以降、後者一つしかない(ベルサイユ会議での人種平等宣言は控えめに提案し、英米の反対に会うとすぐ引いた)。大東亜共栄圏宣言は1937年のパン

ドンVA会議の生みの親となっている。日本はもって世界に普遍性ある理念を提示してもよいのではないかと思われるが、何故しないのだろうか？

(答)

世界に向かつて普遍性ある理念を提示することをしないのは政治家に限らない。学者でも、岡倉天心、内村鑑三、新渡戸稲造、鈴木

大拙、大東亜共栄圏の基礎付けをした京都学派の学者を除いてほとんどいない(後述するが、日本国内では思想論争は盛んで思想の博物館と言われるくらい多種多様な思想が生まれている。しかし、それを世界に広げてゆくとした思想家はほとんどいない)。これは、明治以降、日本のインテリが西洋の学問ばかりしてきた為なのであるか？それとも、日本の大衆にも思想は外から来るものと考えられる傾向があって、それがインテリの足を引っ張って普遍性を持つ日本発の世界像を考える勇

気をくじいているのだろうか？私の考えは、

以下の通りである。

日本人は、1900年代に、「日本人は経済効率のこまか考えられない、思想性のない低俗な民族である」と主張したレビ・ジャコブソン(例・チャーマーズ・ジョンソン、カレル・ウオルフレン)が考えるほど思想性のない国民ではない。

日本の思想にも獨創性は十分あると、「日本人は、思想は外から来るものと考えている」(『この国のかたち』の巻頭)と主張する歴史小説家・司馬遼太郎も認める。

日本の歴史で思想の花が開いたのは鎌倉期と江戸期である。今日の日本仏教の三大宗派(浄土真宗、曹洞宗、日蓮宗)が生まれたのは鎌倉期である。それぞれの宗派の開祖である親鸞、道元、日蓮の絶対者のとらえ方は、ドイツ観念論の三大哲学者カント、シュライエルマッヘル、ヘーゲルのそれに相当する。親鸞とシュライエルマッヘルは絶対者を慈父母のようにとらえ(情的把握)、道元とカントは各人の内なる絶対者の道德律を実生活で実現する義務を説き(意志的把握)、日蓮とヘーゲルは歴史を絶対者の意思の展開と見て、絶対者の意思を正確に理解する必要性を説いた(知的把握)。

江戸初期の中江藤樹は、朱子学のみが公認哲学とされた江戸初期において、朱子学のアンチテーゼである陽明学の思想的深化に努めるだけでなく、それを庶民の実践哲学とした。彼の宇宙観はスピノザの宇宙観に似て、宇宙万物の本質は、宇宙の始まりとともにある神聖なる要素が充満したものであり、この神聖なる要素が具現化したものが人間であると説いた。彼は人間の価値・能力を説く際に、階級的身分に論及することが全然なかった。彼の私塾では、全ての階級の者が机を並べていた。

中江藤樹の宇宙観並びに人間観は、多くの儒学者に影響を与え、以降、日本における儒教思想において朱子学的人間観(インテリだけに思想能力があり、大衆は牛馬の如く思想能力も無いとして、身分制階級社会を宇宙意識が要求するものであるとした)は影をひそめて行く。これが明治維新において下級武士と庶民層が江戸期の身分制階級秩序を破壊する原動力となっている。日本人はフランス革命の影響を受けるまでもなく、既に平等な人間観をもっていたのである。

江戸中期に出た禅僧・白隠は、キリストが神を父と呼んだように、仏を父と呼び、迷入る人間を、富豪の息子に生まれながら家出をして生活に困窮した放蕩息子にたとえた。これは、キリストが語った放蕩息子のたとえ話と瓜二つである。このように、西洋思想史に登場する主要な思想は、それと瓜二つの思想が日本で独自に生まれている。それは、ニュートンの微積分学と同じ数学が、和算としてニュートンと同時期に生まれてきたのと同じ現象である(鎌倉仏教はドイツ観念論より古く)。このように、西洋思想史に登場する主要な思想は、それと瓜二つの思想が日本で独自に生まれている。それは、ニュートンの微積分学と同じ数学が、和算としてニュートンと同時期に生まれてきたのと同じ現象である(鎌倉仏教はドイツ観念論より古く)。

明治維新後、日本の思想はインテリの目指す方向と大衆を教導した新興宗教家の目指す方向と二分化してしまう。民間のインテリ思想家たちは、帝国主義の世界において日本とアジアはいかに連携すべきかという政戦略論に進む。一方、人間並びに宇宙の本質論は大衆を教導した新興宗教家・道德思想家が担うことになった(いくつかの新興宗教はユニークな天地創造理論をもっている)。勿論、アカデミックな世界は西洋思想の圧倒的な影響下に入るのであるが、江戸期の官学であった朱子学の学者に見るべき思想家がいなかったのに等しく、西洋思想の影響下に入ったアカデミズムの学者で見るべき思想家は西田幾多郎くらいである(西田幾多郎も西洋思想と距離を開けることにより独自思想を展開した)。

明治維新後、新興宗教で世界布教に尽力した例がいくつかある。戦前は天理教が朝鮮布教に努め、戦後は世界救世教が自然農法と手かざしのヒーリング手法を発展途上国に広げた。愛国的な生長の家とモラロジーがブラジルの日系人に広がり、今日では日系人以外にも広がりを見せている。創価学会は海外布教の成功を誇っているが、国粋的な日蓮宗の色彩を完全に喪失している。統一教会が韓国的色彩を保持しながら世界宗教化に成功したような例は日本にはない。

日本人の思想的獨創性は司馬遼太郎が言うように高く評価できるものの、日本の大衆は自分の信仰生活が日本流であれば満足であり、そのスタイルを海外にまで広めたいとは思わないようだ。アメリカが世界中に福音伝道師を派遣したのとは雲泥の違がある。「思想は外から来るもの」と考える「日本人の傾向は、日本流のやり方を世界に広げよう」とは決してない」という意味に限定すると正しい。日本人の思想面における非侵略的傾向が、日本に思想なしと誤解される大きな原因となっているが、実際には日本では西洋思想史に登場する主要な思想に相当する思想が生まれ、これらの思想が大衆を教導してきた。これらの思想家がアカデミズムの世界に住む人々たちではなかったことが日本思想史の大きな特色である(ドイツ観念論の三大哲学者はいずれも学者としてメシを食べてきた。明治以降の日本のインテリは彼らに威伏してしまっただけであるが、我々はキリストが生涯を通じてアカデミズムの世界とは無縁の人物であったことに思いを馳せる必要がある)。

明治以降、日本と西洋の思想交流は、アカデミズムの世界に住む人々たちだけで行われてきた。日本の学者たちは西洋の思想家の書物は読んで、日本の新興宗教家・道德思想家の書物は読むことはなかった。西洋の学者に「日本に思想なし」と伝えたのだから、それを日本人一般は別に残念とは思わなかった。日本人一般は日本の思想で人生を送れることに十分満足していたのである。

ところが世界の舞台では沈黙は必ずしも金ではない。精緻な論理で裏打ちされた外国政府提案の世界像に日本政府の当局者はしり込みをしている。この自信のなさ、日米の外交スタイルの違いに反映されているのだから。普遍性を持つ世界像を自らは決して提示しないで、それを外国政府に提示させて、そのフレームの中で日本の利益を図ろうとする日本の外交姿勢は明治以来、一貫して変わらない。

以上